

Title	マルト・ ビベスコと彼女の小説 (V)
Sub Title	Marthe Bibesco et ses romans (V)
Author	佐野, 満里子(Sano, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.32 (2001. 3) ,p.40- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20010331-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルト・ビベスコと彼女の小説（V）

佐野満里子

5. 《平等》

30年代のマルト・《平等》の出版まで

マルトは1935年にフランス共和国のモットーから一語をとって《平等 Egalité》¹ という題名の小説を出版した。

1930年代に入り、40代半ばのマルトは頻繁に英仏とルーマニアの間を行き来している²。英航空相となった友人トムソン³ は1930年に飛行機事故で死亡した。彼について本を著すために何度も英国に渡り、彼と親しかった首相ラムゼイ・マクドナルド⁴ を訪れている。ルーマニアの大公妃と社会主義者の首相—彼の母は田舎のつつましい家事使用人であり、父を知らなかった

1. Princesse Bibesco ; 《Egalité》 (『La Petite illustration』) 1935

2. Ghislain de Diesbach ; 《Marthe, princesse Bibesco》 (Perrin) 1997

伝記事実についてはこの本による。

マルトの他の小説については拙稿《マルト・ビベスコと彼女の小説（I-IV）》を参照して頂きたい。（日吉紀要 No 28, 29, 30, 31）

3. Lord Thomson of Cardington (1875-1930)

1915年にルーマニアの英国大使館附武官としてマルトと知り合う。後に労働党から立候補して政界に乗り出し、マクドナルドと親しくなった。

4. James Ramsay MacDonald (1866-1937)

1924年に英国初の労働党内閣首相。以後 '29-'35年まで計 3 期首相をつとめた。

一のあいだに友情が生まれた。32年にはマクドナルドの娘の結婚式に主賓として招かれる程である。大戦直後に外交官で英国駐在の従兄アントワヌ・ビベスコが元首相アスキース⁵の娘と結婚したことも彼女と英国を結びつけている。

31年の春、夫ジョルジュが航空機によるインド遠征を企てる。彼は事故で大やけどをするが、無事に戻り5月にブカレストで国際航空連盟会議を主催した。当然マルトはホステス役を務める。その間に彼女と親しかったスペイン王アルフォンソ13世が廃位、追放されて共和国が成立した。

32年3月にアリストイド・ブリアン⁶が亡くなる。説得力のある演説で知られ、首相を11期もつとめた社会主義者である。彼はヴァレリイ、ジュリアン・パンダと共にマルトのサロンの常連であった。彼の死でマルトのレジオン・ドヌール獲得運動は難しくなる。仇敵エレヌ・ヴァカレスコの反対運動は激しかった。マルトの受勲はこの30年後のことになる。マルトはビザンチン以来の祖先の栄光の歴史をまとめる大計画に着手、32年秋にコンスタンチノーブルに赴く。ロンドンやパリでマクドナルドと会い、ルーマニア宮廷に出仕し、イタリアの王族の結婚式につらなれた。航空機への関心を夫と分かちあい、英国貴族が自由に使わせてくれる家用機で英国に、エジプトにとかつて通った道を空からたどる喜びを知った。33年の冬はエジプトに滞在

5. Herbert Henri Asquith (1852-1928、首相在位1908-26年、自由党)

ルーマニアの国会議員であったエマニュエル・ビベスコは1917年に自死を選ぶが、国のために弟アントワヌが英国の首相の娘と結婚することを望んでいたとイーニド・バグノルドは書いている。

《Enid Bagnold's *Autobiography*》(Heineman) 1969 p. 125

6. Aristide Briand (1862-1932) マルトは《平等》の中で数回ブリアンの名前をあげている。ピエールの市庁舎にランベスク夫人が初めて訪れた時に目にするタピスリーは、下は大革命前に夫人の曾祖父の弟が長である大司教館のものであり、政教分離を推進した1911年のブリアン法により市庁舎の壁をかざることになった (p. 8)。またピエールが中央政界でめざましい出世をすると、父親の判らない彼は貴族の隠し子ではないかと取り沙汰されるが、これはブリアンの時に起きたのと同じだとしている (p. 82)。

し、社交行事にいそしんでいる。

だがこの時代は、大戦後の経済の建て直しがすすんだと思うと米国の恐慌の影響が波及し、英仏もさらに経済基盤の弱いルーマニアも失業と社会不安におそわれていた。ヒットラーが政権を握り、ムッソリーニが台頭してきている。

マルトは会食者から戦争を仄めかされたり、パリでデモが暴力化するのを見た。マクドナルドからもらう手紙にも戦争の可能性を予測するベシズムが読みとれる。このような時期、彼女は社交と旅行の合間に《平等》を執筆した。小説が出版されたとき、マルトは50歳に近いが、健康で美しく、大英帝国の首相に愛されているという満足感に満たされていた。

2つの世界の2人

物語は南仏の山道での自動車事故現場からはじまる。通りかかったピエール・カニオ Pierre Caniot は意識を失っている女性を発見して救助する。運転手は死亡していた。ピエールは社会主義者でX市の市長兼国会議員である。選挙戦のために移動中の出来事であった。

女性はランベスク公夫人 Princesse de Lambesc。スチュアート家の血を引くスコットランドの貴族の生まれで、遠縁のフランス貴族と結婚したが夫はすぐに戦死した。歴史をさかのぼると、この両家の間で英仏海峡を渡っての縁組が幾度かおこなわれている。28歳の未亡人である夫人はX市の修道院に運ばれて手当をうけた。土地の新聞は市長の善行をトップで報道したが、パリの新聞は社交欄のランベスク夫人の事故のニュースのなかで社会主義者の名前に一切言及しなかった。

ピエールは父を知らず、母は家事使用人であった。これは明らかにマクドナルドをモデルにしている。ピエールは子供の時から羊飼いととして働き、その後植字工になり、組合指導者として投獄されたこともある。政治集会で支持されて国会議員に選出された37歳の独身の市長である。

ランベスク夫人の身内はフランスには少ない。彼女は19歳で結婚、戦死した夫の忘れ形見である8歳の息子と83歳の夫方の祖父と生活していた。虚弱

な一人息子が家庭教師の神父に連れられて母を見舞いにきたが、学校を休まぬために翌日には帰っていった。古い貴族のつねとして外国に親戚があり、諸外国、ことに英国から見舞いの電報が届く。貴族社会で最も高い地位にある夫人は社交界には顔を出さず、ひっそり屋敷に籠もって暮らしていた。

ピエールは選挙戦の真っ最中であった。近隣の人々に燃えるような弁舌をふるったあとの帰路にかならずランベスク夫人を見舞うのであった。社会主義市長は遊説先の子供達が摘んでくれた春の野に咲く赤いアネモネの花束をもって、反動主義の砦とみなされている修道院の病室に立ち寄るのである。夫人の回復はおそかった。

5月中旬にピエールは大勝し、国会が休会に入った。議員市長は「我が町にすっかり自らを捧げ、そして町をランベスク夫人に捧げる時間」があった。都市計画の目論見を夫人に語り、地図や設計図をひろげる。貧しい人々の住む地域に夫人の好きな白木蓮を街路樹とし、夫人の名前にちなみアリス通り Allés Alys を計画する。そして彼女は自然に世話を受けている修道女達の代弁をする事になった。

ランベスク夫人は死の瀬戸際から蘇生できた安堵感で、苦痛からいやされるとともに生まれてきた甘やかな感情、経験したことの無い情熱をピエールに持ち始めていた。ピエールは長い間、人々のために献身的に働き続けてきたので、もう別の愛に捧げるものは自分には無いと思いこんでいた。それぞれ孤独であった2人は気づかずにお互いに愛情をはぐくんでいた。

事故から三月後、ようやく夫人のギブスが取れ、出発は7月14日である。共和主義者としての配慮を投げ捨ててピエールは彼女を駅まで送り届けた。まさしく革命記念日にこの貴族の女性と別れた社会主義市長は記念集会で演説しなくてはならない。市民に、第三共和国の労働者に呼びかける言葉を考えながら、彼はむなしさで満たされる。彼には友人がいない、彼女だけしか愛していないことを知った。

作者は全く違った世界で生きてきた2人の恋を描きだすのに「芝居であれば幕の上がる前に大団円が終わったようである（p. 7）」との解説を入れる。

事故で車から投げ出された夫人はピエールの腕の中で意識をとりもどし、彼の胸にすがってすすり泣いてしまい、恋の到達点から出発しているのだ。そこからかなり図式的に共和主義対王党派、労働者社会主義対貴族、ライシシテ対カトリックの諸々の要素を並べだす。

貴族・月の世界

X市を去った夫人はスコットランドのインヴァネス近くの実家に身を寄せる。ここはマクドナルド英首相の故郷であり、マルトは首相の私邸に招かれたことがある。ランベスク夫人はピエールに手紙を出すときに必ず野草の押し葉をひそませる。スチュアート家につらなる紋章入りの封筒から、羊飼いの少年が親しんだ植物の精気が香りたつ。ピエールはイヌサフランの押し花に秋が来たのを知った。2人が再び会うのは自動車事故から数ヶ月後であり、リール街ランベスク邸で夫人がひとりの時に庭にピエールを迎え入れた。郊外のアゼイ・ル・ブルュレ Azay-le-Brûlé の別邸にいる老エルブッフ侯 (duc d'Elboeuf) はそのことを知っていた。村人を迎えて心付けを渡すのと同じように、自動車事故の際に助けてくれた人物に謝意をあらわすため、それに庭で応対したのは家にあげたことにならないというのがこの王党派貴族の解釈である。ピエールは初めてこの邸を見て、「彼女は役所に住んで居るんだ (p. 13)」と感じる。彼にとってパリの古い邸宅は旧貴族の住まいである前に、共和国政府の役所として親しんだのだ。門を入れて邸の扉にたどり着くまで広い中庭を横切る時、彼は見張られているような居心地の悪さを味わう。

広い庭園を二人はいつしか手をつないで歩くうちに5時になる。門番夫婦が戸外にお茶の支度をした。

このフランス人はワインを飲みつけているが、いままでお茶を飲んだことはなく、5時どころか昼も夜も飲んだことはなかった。彼等の風習、伝統、習慣は違うのであり、それに合わせることは出来ないだろうという証明が(彼に)必要なものであろうか？

湯気のたつ華奢なカップを唇に近づけ、新しい生活がピエール・カニオに始まった。初めての飲み物は彼の喉を焼いた。少し待って、少しずつ飲むことを知らされる前に。(p.15)

庭園内には祖先が密かに引き受けて葬った王妃様の愛犬の墓があった。夫人はまるで昨日のことのようになり・アントワネットのことを語り、リール街界隈を散歩するときには恐怖政治のもとで処刑された祖先の様子を語りピエールを驚かせた。革命から140年近く経つのに18世紀に生きているかのようで、まるで月の世界にいるようだと思う。そのような過去にさかのぼる話をする時、夫人はつねに「私どもは」と言う。共和国原理にもとづいて暮らしてきて、自分も彼女も個人だと考えたいピエールは感情を害する。突然に名も知れぬ多数の死者達が彼女と自分の間を裂いたように思われるのだ。

階級と政治家の *maîtresse*

ランベスク夫人の髪は子供のように淡い色で、いつも白いドレスを着ている。秘密を語るときの子供が囁くような話し方もあいまって少女のような感じを与える。事故のあと歩くときに軽くびっこをひき、男性に支えたい気持ちをそそる。内気さとおもわぬ大胆さを兼ね備えている。

ピエールは火のような雄弁で選挙民を魅了し、仕事に打ち込むエネルギーな男性である。少年時代に羊飼いであった彼は選挙民を、町を導く指導者となった。広い肩幅でいつも仕立ての良くない黒いスーツ姿である。

次の春、約束どおりにランベスク夫人が再びX市を訪れ、修道院に3泊した。ピエールは毎朝彼女を迎えに行き、港や労働者住宅地区、工事現場、そしてアリス通りへと案内し、町中のうわさになる。社会主義市長が貴婦人に恋をしているのだ。

彼は人々の思惑に気付きもせず、ランベスク夫人を伴って労働者達のそばを歩き、車で埃をたてて通る。「当然ながら背の高い (p.37)」夫人は偏見をいだいている人々の目には極端な大女に見え、噂がふくらんで彼女の白い衣類はテンの毛皮に、結婚指輪だけなのが10指にことごとく宝石を付けてい

たことになってゆく。大革命から130年以上経ても、貴族に対する憧れと反感がまざりあった庶民感情はしっかりとこの地方都市に根付いている。

フランスでは愛人 (maîtresse) という語は全てをあらわす。男女の結びつきは本当に束縛するものであり、愛人は支配するものだ。愛人を持つと、自由であった男も自己を支配する力を失ったと他人に思われてしまう。それが政治家であったら、どんな愛人を選ぶかは国家に関わる問題となり、関係者はすべて影響される。すぐにその政治家は彼女に支配されていると思われてしまうからだ。サリカ法⁷ が支配しているこのフランスという国において、明文化されていないものの男の隷属状態はこのようなものである。(p. 25)

マルトはフランス語・フランス文化を基礎とする教育を受けて育っているが、19世紀末ルーマニアの支配階級の生まれである。フランスは彼女にとってやはり外国にちがいない。フランス王家に外国から嫁いだメジチ家のカトリーンが「常に間接的に女達に支配されてきた国」と言ったことを引いているとも思えるマルトの意見である。しかし、マルトは自分自身が男性の影から間接的に力を発揮することを考えた事はあっても、女性が直接政治に関わることは考えていない。作中で英国の貴族制度について触れているが、1828年に成立した英国の婦人参政権に関心を見せた様子はない。

ブルボン家の王達だけでなく1930年代のフランスには、出自はともあれ貴

7. サリカ法はクロヴィスのフランク・サリ族の慣習法であり、女性には相続を認めていなかった。

8. E. ダラダイエ (1884-1970, 首相在位 '33-'34, '38-'40) は寡夫となってからクルツッソル公爵夫人と、P. レィノー (1878-1966, 首相在位 '40) はポルト伯爵夫人と親しかった。

アンドレ・シモーヌ著・蒔田廉訳《呪われたフランス》(八弘書店) 昭和16年 p. 282-3

J = J. セルヴァン・シュレベール・奈良道子訳《フランスのジャーナリストの挑戦》(近代文芸社) 1996 p. 44

族夫人のタイトルをもつ女性を愛人とした政治家があり、彼女達はパートナーに対して影響力をふるい政治力を発揮している。⁸

X市の古物商ユードクシー嬢⁹は遠くからピエールに恋心を燃やし続けた。醜女の彼女は一時のアヴァンチュール用の部屋貸しで儲け、歴史のない成り上がり者に没落した家の思い出の品を売りつけていた。彼女は恋文も贈り物もピエールに相手にされなかったところへランベスク夫人の噂が耳に入り、恋心は憎悪にか変わった。夫人の祖先のロレーヌ公ランベスク元帥がドイツ王の軍を指揮してフランスの民衆に突撃を行っている版画を店のウィンドウにはり出した。第一次大戦後まだ10年で反独感情が強く残る時代のことである。あまり旅行をせず、外国人嫌いと言われる当時のフランスの庶民の反感をかき立てる策略だ。ピエールの側近ブロニアルがそれを買取ると、すでに買い占めてあった同じものをまたはり出すのであった。この店にはピエールから注意を受けて傷付いた市役所の書記や他の国会議員も出入りしている。ユードクシー嬢は彼等から抜け目無くピエールのバリの情報まで手に入れており、それを彼がもっとも困る時を選んで新聞に流すのであった。

元教師のブロニアルは少年時代のピエールに才能を見出して教育を助けた人物である。しかるべき地位についたピエールは彼を党の書記に任命し、相談相手としている。ランベスク夫人の再訪後、そのブロニアルが昔の教え子にさしだした新聞には「よっぱらいの社会主義者 Le socialiste dans les vignes de Seigneur (p. 31)」、「元共産主義者の変節」「公妃と社会主義者」といった言葉が踊っていた。そして「彼女はもう来てはならない」と言う。ピエールは怒りを爆発させ、「この町はもう私を見ることはあるまい」と言

9. マルトはつねに敵対するエレーヌ・ヴァカレスコの風貌をそのまま、美しくはないユードクシー嬢の容貌に描いた。ユードクシーという名前の悪名高いビザンチンの皇后がいる。Caniot はマルトに50年近く仕えた小間使の姓であり Lambesc には香り立つ ambre, musc を連想させる。Elboeuf は頑固な牛のような老人にふさわしく、Montjoye は豪快で陽気なスコットランド貴族に似せた名であろう。ご意見番のブロニアルは grognard（ぶつぶつ言う）を思わせる。

いきった。

貴族と庶民の共通点は

ド・ランベスク夫人の自動車が事故にあったのは大戦末期に戦死した夫の棺を仮埋葬してある南仏の僧院からパリのピクピュス Picpus¹⁰に移すための旅行中のことであり、事故で果たせなかったこの任務の途上でX市を再訪したのである。

ヨーロッパの王族や貴族は釣り合い、あるいは政略から各国の同じ階級内での結婚がおこなわれていた。彼らにはあちこちの国に親戚があるので、それらを外国とはとらえていない。戦死したランベスク公フランツは神聖ローマ帝国以来の独仏伊等数カ国の貴族の血を引き、それらの爵位を持つ身なので第一次大戦は「彼にとって内戦 (p. 31)」にすぎない。自由、平等、友愛のどの標語も信じないが、彼はフランスという祖国が与える死を受け入れてひと飛びである世に行くのである。生も死も大した問題ではなく、自分の生は長く続く血筋の鎖の輪のひとつにすぎないと考えていたのだ。鎖の輪の一つにされることに懸命に抵抗していた《カトリーヌ・パリ》の夫アダムとは双子の兄弟と言える。棺を引き渡すミサの間、夫人は敬虔な信者として短い間ながら深く結ばれたフランツとの結婚が天上まで続くべきでないかと考え、思いがけない出会いからゆれた心を見つめて苦しむ。霊柩車を先導する彼女の車が夕闇につつまれて進むと、高台に炎が見える。火につつまれた一台の車のまえに、道の真ん中にピエールが立っていた。

このように、彼を本当に夢中にさせたのは彼女のせいであった。なんと素朴な心、ロマンチックな革命家の心であろうか！ ブルジョワにはけして出来ないことだわ、と夫人は思う。この行為にはおぞましく、乱

10. Picpus は大革命でギロチンにかけられた人々の遺体を葬った共同墓地。19世紀に入り貴族が管理を始め、各家ごとの廟もつくられた。手狭なためエルブッフ侯が存命中なのに孫のフランツを葬るのには許可を得るための時間が要ったと作者は説明している。

暴で悪趣味なものがある。だがなにか健全で強く完全なもの、船を焼き払い、持っているもの全てを賭け、とうせんぼうをして彼女にさげんできるように。「止まれ、私をおいては行かせない！」（p. 30）

ピエールは彼女の車に乗り込むほかはない。それは2人が出会うこととなった自動車事故の場所であった。

作者はランベスク夫人から見たピエールの美点を庶民のそれとして書きだしている。まず、彼の生活態度の厳しさ、人々のために尽くす社会主義の信条が福音書に非常にちかいと思う。そしてこの大地の男、風の男は都会人、ブルジョワからほど遠く、密猟者に近いというのだ。貴族は最初は闘う人＝騎士であり、それから土地所有者になったので、闘争心と指導力を伝えてきた。彼等は全てを失っても貴族の血の誇りが残る。庶民は失うものが少ないので、失うことを恐れない。それが素朴な自信をうむ場合がある。都会人のブルジョワは法をにらみながら持てる物を無くさないように気を使い続ける。財産を失ったブルジョワはもうブルジョワではない。作者は貴族をまねるブルジョワのいじましさを排し、まねる手だてを持たない庶民に貴族と共通するものを書き出す。まだ庶民が貧しかった1920年代の後半に恋のため車を焼くのは現実離れしている。しかし、この荒々しい行為は土にふれ自然のなかで生きてきた人間の自信のあらわれとして魅力的である。町よりも彼女を愛する彼は町を棄てる。町と恋の双方は相容れないと判った以上、一方を犠牲にする他はない。彼はパリに発つ。パリは「解放してくれる町、あらゆる他の町を忘れさせてくれる町（p. 32）」であり、作者はすでに『カトリーヌ・バリ』で描いたこの大都会のもつ解放感と魅力をここにも書き込んでいる。

ランベスク夫人はスコットランドで育ったためにフランスの貴族と庶民の間にある根深い不信感をよくは知らなかった。彼女の生家では村人も地主の貴族も同じ教会で祈っていた。

ピエールは「これが生き延びていること自体が理性に対する挑戦とも言えるカースト（p. 8）」であるフランス貴族に関し無経験であり、子供のように無知であった。彼はこの世界に打ち勝って彼女に相応しいものにならなく

てはと、心は高揚する。X市を愛して2度も大臣の椅子を辞退した彼だったが、内閣改造の機会に内務大臣の地位を獲得した。労働争議を指導して投獄された経験のある左翼政治家のピエールが、恋のためとはいえ警察の長になるのはやや無理な筋運びにみえる。作者はここにナポレオンと皇女マリー・ルイズの結婚と同じように、権力を得た褒美が女性である場合だとしている。

彼は毎日ランベスク夫人に手紙を書く。《イズヴォール、柳の里》の村娘達のように、夫人は毎朝受け取った手紙を一日中身につけてすごし、夜に読み返したあとで燃やしてしまう。スキャンダル種の種にされる危険があるからだ。

合同大演習

パリ郊外にあるエルブフ・ランベスク家所有の広大な地所内で英仏および数カ国軍の合同演習が行われた。陸軍大臣となったピエールは城に宿泊する。彼は以前には戦争を非難していた。戦争に関わる地位につく時、「彼が戦争反対論を存続させるためには、この思想を理解しうるフランス国民の破滅を防ぐ以外の方法がないからである。(p. 63)」作者は「彼は自分の役割を子供達をやしなう父親が彼等の口に気をくばるように、大砲の砲口に気を配り満たすようにするのだと理解した。(p. 63)」との言い訳をつけ加えている。30年代のファシズムの脅威を考えると現実的な解説であろう。

城の見事なしつらえや木々豊かな庭園、スコットランドから夫人が運ばせた白鳥のうかぶ池というように、作者の筆は貴族の所有する資産、それを維持する知恵や教養を描き出す。そのような背景のもとで英国代表である夫人の兄モンジョワ侯爵 Montjoye はピエールと親しくなり、スコットランドに招待の約束をする。これはフランス貴族には見られないことであろう。王党派のエルブフ侯はピエールを客人として丁重にもてなした。老侯爵にとり共和国は敵であるが、貴族は代々何人も軍人を出しており、一族のものがピエールの下にいる可能性がある。役職というものが彼にこの館の門戸をひらかせた。

晩餐の時、彼は伝統的に陸軍大臣が占める中央の席につき、一同の注目を



図1 前列左3人目からトムソン卿、マクドナルド英首相、マルト・ビベスコ。
(Ghislain de Diesbach ; 《Marthe, princesse Bibesco》 (Perrin) 1997)

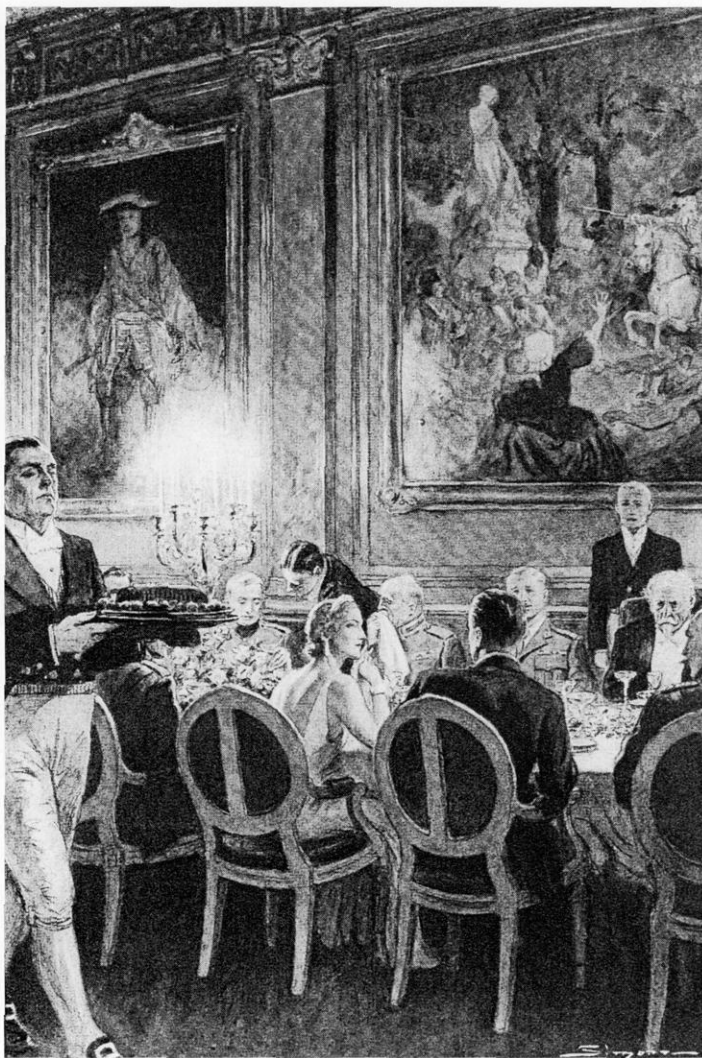


図2 エルブフ・ランベスク家所有の広大な地所内で英仏及び数カ国軍による合同演習が行われる。陸軍大臣となったピエールは城に宿泊し、晚餐の時には伝統的に大臣の占める席につく。彼の隣の席には正装のランベスク夫人。

(『LA PETITE ILLUSTRATION』 No 711 16. février 1935 COMPOSITIONS de J. SIMONET)

集める。だが、彼はその伝統も、自らの素朴さが自分を護ってくれることも弁えている。壁にはユードクシーが店にはりだした版画と同じ図柄のタピスリー「ランベスク公の突撃」が掛けられていた。ピエールは自分は軍の長として突撃する側か、それとも民衆のひとりとして突撃を受ける側かと考える。

彼が覚えているこの空気、かつて修道院を見舞っていたところに夫人をつつんでいた空気と同じであり、再び幸福な温かさの中に戻ったのだ。それは彼が慣れている空気とくらべると稀で、微妙で酸素と香が多いようにおもわれる。この空気に浸り、彼は生命の奥深い本能から心地良くされるのだ。（p. 41）

ピエールと夫人は終始他人として振る舞う。

彼はデコルテに宝石を着けた彼女を目にする。民衆派で労働者代表である彼も、初めて目にする正装の女性の美しさを感じないわけにはゆかない。遙かに上の階級のかもしだす快適さを感じつつも、自分の出自を自覚している明晰さと素朴であることへの自信がピエールをありきたりのスノビズムから救っている。

彼女は制服姿の軍人達の中で一張羅の黒いスーツ姿のピエールを目にする。ブルジョワでないため彼には身体に合わない衣類を気にしない自由さがある。彼女はX市の労働者住宅を作るのと同じように軍備を整える彼の政治力にあるのは愛の力であると理解した。彼は友人であり自分を護ってくれる人だと思ふ。

Picpus

老侯爵が亡くなり、一宿一飯の恩義もあってピエールはピクピュスでの葬儀にでかけた。

カトリックの式典に無縁なピエールは子供のころ見た年寄りがする動作をまねる他ない。大革命で処刑された千三百六人の犠牲者の氏名、年齢、身分が壁に彫り込まれているのを読み、その中にあまりに庶民が多いのを見つけ

ておどろく。政治家として多くの人と接しているが、大勢の参列者の中に知っている顔はなく、彼は場違いな闖入者である。消えそうにない恨みの表情をうかべた亡霊のような人々の行列をみながらピエールは以前ストライキを指揮したときの飢えた労働者達の顔を思い出す。フランス貴族は1789年から失業者にされ、戦争や革命がある度に金を巻き上げられたのだと考える。彼等は遠い親戚にいたるまで葬儀に集まり、そこを宮廷がわりに自分達の名誉慾や自負心を満たしているのだ。

彼女はヴェールで顔を隠している。野蛮な習慣だとピエールは思う。彼の目には、彼女は再び寡婦になってそこにいるのだ。彼女をここから引き出し、連れ去りたいという気持ちがずっと彼を苛んでいる。まるで彼女が死刑に処せられて墓穴の方に進み、生きながらそこに投げ込まれるのを見ているような気持ちである。…アゼイの護衛たちが棺を運んでいる。彼らが埋葬するのは誰なのか？ 彼女の夫か子供か、父なのか？ 全員が一人の人物に混ざり合い、その人物と彼女は結婚しているのだ。彼は彼女が自分から離れているを感じる。誰かが彼から彼女を引き離しているのだ。(p. 61)

ここでピエールが感じたことは、彼にとっての貴族階級の壁の厚さと夫人が担っているものの重さなのである。

彼が参列したことが新聞の写真に写り、ユードクシーの報復の材料にされてしまう。

貴族の担うもの

老侯爵なきあと、彼は少し自由にランベスク邸に行けるようになった。ところが夫人の13歳になった息子がピエールを母を奪う者、貴族を脅かす共和主義者として敵視して書いた秘密のノートが家庭教師が発見した。それを知った夫人は密かに涙をながした。子供と母の双方から別々に救いを求められて、英国からモンジョワ侯がやって来た。彼は町中が貴族を意識させるパ

リから子供を引き離して色々な生徒がいるパブリック・スクールに入れる事を主張し、飛行機で甥をつれてロンドンに発ってしまう。夫人は息子の後を追うため急いでピエールに連絡しようとするが国会会期中多忙な彼になかなか連絡がとれず、電話に出たプロニアルにはつれなくされる。騎士を迎える昔の貴婦人のように、夫人は常に自邸に彼を迎えていたため、彼の行きつけの店もなにも知らない。電報は取り次ぐ人に身分を知られてピエールに迷惑がかかる。とうとう英国の兄に電話で連絡をたのみ、とっさに思いついたコンソルド広場のチュイルリー側の柵前を待ち合わせの場所と言ってしまう。子供の時から恐怖政治期の先祖の受難を教え込まれた場所である。内閣瓦解が伝えられるため広場に多くの人々が居る。雨の降り出した中、ただ一人ひたすらピエールを待ち続けるランベスク夫人は、作者が規定した内気で大胆な恋する女そのものである。彼女には一人息子には自分しかいないとの思いがある。

大勢の人に取り巻かれてピエールは広場にやってきた。貴族と庶民の対決の場であった広場がこのカップルには愛と理解の場につながる。彼は夫人を海軍省内の部屋に連れて行く。それはマリー・アントワネットが王太子妃として住んだ部屋であり、ランベスク夫人の自室とよく似ていた。彼女は百数十年前の高い趣味性を伝えているのだ。

海軍省の中の人の出入りが多い部屋で二人の語らいは愛の誓いにたどり着いた。二人は婚約者となった。彼女は彼に言った、10年か8年、おそらく7年経たないうちに彼のもとに行くでしよう。妖精メルヘンの中で年齢を予測することが出来ようか？ 彼女を自由にしてくれる若い女性が現れるのを待たねばならない。彼女を縛っているものを取りはらい、打ち消しがたい過去の重石を担ってくれるそんな若い娘を。彼女はこのような奇妙なことを言うのにシンプルな言葉を見いだしていて、それは誰もが理解できるものだ。母としての義務、嫉妬深い一人息子にはこの世に彼女しかいないのだと。息子フランソワ・ヴィクトールは結婚するだろう。息子の妻はアゼイを、リール街の屋敷を、祖先達やうけつ

いできたあらゆるものの世話をすることになろう。そして口にする訳に
 いかないフランツのことも。(p. 80)

マルト・ビベスコは結婚後間もなく、夫からうち捨てられた妻にされた。義母は息子の不行跡を知り尽くしており、マルトが別の愛を得ることを認めるかわりに息子と離婚はしないことを約束させていた。1909年に彼女はフランスの古い貴族ボーヴォーと出会い、彼から強く求愛されて1911年に2人の間で結婚についての話し合いが行われた。結婚のためにはマルトは離婚する必要がある。東方教会は離婚を認めているので彼女は離婚が可能であった。ボーヴォーの母は息子が離婚女性と結婚することを断じて認める気はない。フランスでは1884年に離婚を認める法律が作られたものの、マルトは義母がそれ以前に離婚・再婚をしたために重婚者として長い間パリの貴族社会から締め出されていたことを良く知っていた。カトリック教会は貴族社会に大きな力を持っている。離婚法が出来て30年近くたつこの当時でも、離婚後に合法的に結婚するよりも結婚のかたちをとどめての愛人関係を続ける方が摩擦が少ない。ボーヴォーとの結婚を断念した傷心のマルトに夫はビベスコ家の先祖が建てた城館モゴショアイアを従姉から買い取って贈った。Diesbachはこれをマルトをビベスコ家に引き留めようとする義母の配慮と見ている。ランベスク夫人が引き受けている重いものはマルトの義母がにない、城館と共にマルトが引き受けることになるものと同じであり、貴族の家に古くから伝わる有形無形の財産とそれを将来に伝えるつとめである。

愛と別れと信頼と

ビエールは彼女が考え出した結論を受け入れた。彼女の言葉を信じている。幾日、何ヶ月あるいは何年かかろうと、それが二人に何であろう？ 彼は経験によって彼女が時を消し去って、自在に時を創りだせる力を持つ事を知っている。彼はずっと彼女を愛し続けてきたからである。彼女はもう来なくなることはあり得まい。彼はまちつづけるであう。いや、そうではない。それどころか、人生の節目ごとに彼女を迎えに行く

だろう。彼女がきめる逢い引きに先々彼は忠実であろう。これだけが彼女に差し出せる領地なのだから。それはすべてを考えあわせると、素晴らしい、奪うことの出来ない領域である。(p. 80)

多くの人々とは反対に、二人は年齢について年を取るのが遅いと思います。二人があった翌日、夫人はドーヴァーに着いて『デイリーメール』紙でピエールが首相に選出されたことを知った。父親代わりといえるプロニアルはこんなに遠い先での結婚の約束を知り激怒する。貴族の女は遊び抜いたあと、もう子供をもうけて血がまじる心配がなくなった時になってやってくるのだと言い、「エリゼ宮に外国の女をいれるな。」との遺言をのこし亡くなった。2人はスキャンダルを避けるために密かに交際を続けたあと、ピエールの大統領の任期の終わる1週間前に秘密裏に結婚する。¹¹それも教会で行った。しかし、ユードクシー嬢が糸を引くテロによって1948年にピエールの命が奪われてしまう。

このメルヘンめいた結婚にいささか安易に決着をつけた感がある。マルトの親戚であるセルビア王妃の息子夫妻はテロで亡くなっている。1930年代のヨーロッパは左右のイデオロギーのせめぎ合いと国家間の緊張からテロが少なくはなかった。Diesbach は、地方の読者には公爵夫人が、いくら大統領に出世してもゼロから出発した男と結婚するとは信じられないであろうと述べている。真面目なカトリック信者で悩みを神父に告解する女と祈ることを知らない全くライシテのなかで育った共和国主義者の男、邸宅、城館、庭園のしつらえから草花の知識に至るまで高貴な育ちの教養を身につけている女と英国風にお茶を飲むことすら知らなかった男ではとても平和な生活が続くそうにない。だがヴェルサイユ修復完成の式典で、首相のピエールは英国風

11. ガストン・ドゥメルグ (Gaston Doumergue 1863-1937, '24-'31大統領) は任期の終る1週前に長らくつき合っていた女性と結婚した。マルトはこれにヒントをえたものと考えられる。

G. et S. Berstein 《Dictionnaire historique de la France contemporaine 1870-1940》(éd Complex) 1995

にお茶で人々をもてなしている。彼は学習したのだ。作者はこれが「王女と羊飼いの恋」であることをマリー・アントワネットの名前を出すことで解らせている。しかも王妃は浪費をしたかもしれないが、王族の造営したものは当時の文化の粋を残し、多くの職人たちにパンを与え、後世にまで観光資源としての利益に与らせていると貴族文化を弁護している。

少年時代に羊の群を導いていたピエールはフランス国民を導く大統領になった。いわば牧人である彼が嫉妬からにせよテロの犠牲になったことはキリスト教の教義を呼び起こす。マルトは1912年に、ミュニエ神父¹²のもとでカトリックに改宗している。「侯爵夫人達の告悔師」と言われるミュニエ神父から「姪」と呼ばれた彼女は高齢の神父に付き添い、英国のシェークスピアのゆかりの地訪問すら行っている。フランスで婦人参政権成立が1944年と遅かった理由にカトリックが女性達に大きな影響力をもっており、彼女達が宗教の指示に従って投票すると共和国原理を脅かすと考えられたことがある。それは女子教育や女性向きの出版物に宗教が力があつたからである。《平等》が発表された『イリュストラシオン』紙の別冊付録は新聞小説の読みやすさ、女性読者に受けることを求めたと思われる。貴族は神を崇うことを務めとしてきた。マルトはキリスト教の比喩を用いて分かりやすい物語を作ったのである。

作者はランベスク夫人がもたらす外国＝英国の文化を描く。さらに英仏の貴族制度にふれ、長子のみが貴族を嗣ぐ一方1代貴族がある英国であれば、ピエールは国王夫妻と同じ食卓につけるであろうという。「あの連中は…」という言葉で王党派旧貴族は庶民を、庶民は貴族や外国人を差別するのを描いたために、フランス人にこの作品のうけが悪かったと Diesbach は見ている。当時の上流の結婚において階級意識の建前は崩れてはいない。ルーマニ

12. マルトは神父について3冊の著書を著している。

Princesse Bibesco 《Croisade pour l'anémone》(Plon) 1930

Princesse Bibesco 《La vie d'une amitié》(Plon) 1955

Princesse Bibesco 《Le confesseur et les poètes》(Grasset) 1970

ア王子もふさわしくない女性との交際のため1925年廃位に追い込まれている。《平等》が出版された翌年の1936年に英国王がシンプソン夫人と結婚するために退位した。《平等》は短い章に分けられており、幾つかのものにエピグラフが付けられている。第一章のそれは、マイヤーリングの悲劇の主であるルドルフ大公の一人娘、ハプスブルグ家のエリザベートが収監中の社会主義者達を非合法に助けたために逮捕されたという新聞報道である。このような時代にマルトは交際のあったマクドナルド、トムソン、ジューヴネル等の社会主義政治家からヒントを得て生みだしたピエールの相手に、貴族で最高の血筋のランベスク夫人を並べてリスクを想像して楽しんだようだ。

作者は貴族と庶民の間のブルジョワという言葉をも批判的につかっている。ランベスク夫人が邸の内装に「後世のオリエンタル趣味や王政復古期のものを取り去って」本来のローズウッドの木地に戻すように、作者は19世紀ブルジョワの時代をこえて更に古い貴族の美点を求めているのだ。

マルト・ビベスコの平等感

不釣り合いなカップルが成立後の生活は、死が2人を分かち所で話は終りそうであるが、作者は終章にピエール・カニオ未亡人の葬儀を報ずる右派の新聞記事で小説を終わらせる。「第17代モンジョワ侯令妹、初婚でランベスク公夫人、再婚で仏大統領夫人となった彼女の葬儀は子息のエルブフ侯爵夫妻、孫のランベスク公爵夫妻が執り行い… (p. 126)」というのだ。1927年の自動車事故の時に8歳であった子供が13歳になった5年後に夫人は英国行きを余儀なくされる。その時に婚約した二人はピエールが首相から大統領となって7年の任期末に結婚したのであるから、それは1939年以後と考えられる。その彼女に孫夫婦がいる以上、夫人の死は1960年以後であろう。《平等》を書いた当時、マルト・ビベスコが第二次大戦の可能性をかなり意識していたと思われる。歴史がどう変わろうと、少なからず自己を投影したランベスク夫人によって、貴族の血筋の永続性への強い祈願を現したことは確かであろう。マルトの一人娘はルーマニア名門貴族に嫁ぎ、1928年に男児をもうけている。孫の誕生は大層マルトを喜ばせた。彼女は跡継ぎを得ることを大切

に考えるから、「ピエールは一人、フランスの栄光のために取り置かれた不毛な場に、家族が入ることは許されていないところに眠っている。同一の国が2人を別々にし、死の前に不平等にしている。(p. 88)」とパンテオンのことを描写する。共和国の偉人達を祀る場所は、フランスの旧貴族には禍々しく見えるであろうとの外国の貴族マルトの考察であろう。

作者はこの作品でもう一つの「平等」を扱っている。先に紹介したいいずれの小説においても、女性にとり最も大切なものである男性からの愛への忠実さ、貞節の持続性 *durée de fidélité* についてふれている。成熟した男女が長い婚約期間、それも結婚の時期が未定なのに信じあい、おたがいを求め待ち続けるとは「信じられない話 (=妖精メルヘン *conte de fées* p. 80)」であろう。作者はピエールの地位が高まるにつれて、右派の巣窟である社交界のサロンの女性達が近づくことも書き落としはしない。しかし彼は「子供をもたらす女性よりも、夢をもたらす女性」であるランベスク夫人を待ち続ける。おとぎ話の終りは、結婚した2人は子供を沢山つくって幸福に生きたことになるのに¹³、《平等》のカップルはこの定石からはずれている。子孫を残すことを大切に考えるマルトがピエールに子供をもたらさない結婚を選択させたのは、女性を子を生む役割に閉じこめないあり方を示唆している。

ボーヴォワールがサルトルの提案を受け入れて、別々に生活しながら信じ合い、2人のどちらかが相手に呼びかけたら必ず応ずるという約束をするのは1920年代の終りである。マルトはボーヴォワールより30歳上であり、母親の世代にあたる。1935年に発表されたこの《平等》は、一人の女性が貴族文化の知恵を駆使して男性との間に愛の持続をうち立て、対等な関係を築くという夢物語としても、ボーヴォワールが実現した愛情関係と等質の部分があると言えよう。

ラモン・フェルナンデスは《平等》の9年前に《緑の鸚鵡》が出版された時、これについての評論を『NRF』に発表している。¹⁴ 彼はマルトの見事な

13. ビベスコ皇女著・安堂信也訳《チャーチルと勇氣》(東京創元社) 1957 p. 188

14. Ramon Fernandez 《Le Perroquet Vert》(『NRF』) 1er sept. 1924

フランス語の表現、常にところを得た優れて鋭い描写を賞賛するが、物語に伝説や神話をちりばめてイメージを繰り返して想起することでレアリズムを見せないことに不満をもらす。なぜなら、これは美しい「妖精メルヘン」だからだ。「一般的に言って一私は作者に一つ非難をする事になるが一物語の大筋 trame からかざりの部分 broderies をやすやすと取り外すことが出来る。それらがあまりにも独立しているようにみえるのだ。(p. 377)」と苦言を呈し、「ビベスコ大公妃は妖精メルヘンと小説の間でまだ迷っておられる。彼女が思い切って小説を選択なさることを願っておこう。しかし妖精メルヘンをすっかり忘れてはしまわないで」と結んでいる。

洞察力鋭い評論家が指摘したように《平等》においても本筋にかかわりのない細部が沢山盛り込まれている。ピエールがランベスク邸を訪問するとき、見張られているようで気になる門番夫婦は彼の故郷出身者であり、田舎から持ってきた一本の葡萄を育てることで石の町パリの生活のストレスを解消している。ピエールは門番の妻に女中であった母と似たものを感じる。やっと実った一房の葡萄に一喜一憂する素朴な夫婦のエピソードは心なごませるが、本筋にはかかわらない。またモンジョワ侯もピエールも航空大臣になり、2人で航空事業が世界をつなぐ夢を描く。老侯爵の死でランベスク夫人が急遽英国から帰国するときも、母子からの求めに応じてモンジョワ侯がブルジェに到着し、成り行きで甥をつれてロンドンに発つのも飛行機である。マルトの夫は世界航空連盟の会長であり、親しかったトムソンは英国の航空大臣であった。彼女がよく知っているこの新しい輸送手段の魅力を作品に取り込もうとするのは不思議ではない。これらはフェルナンデスが指摘するかざり＝刺繍ともいえよう。だがこれらの細部は美しく楽しい。『NRF』に集まる作家達やブルーストのように新しい文学を模索するよりも、彼女は親しみやすい小説を創り出す。フェルナンデスは《緑の鸚鵡》の中の巧みな人物描写の部分を風俗小説にふさわしいと指摘した。《平等》は風俗小説である。そして「妖精メルヘン」という語をマルトがこの作中に使うのは、批評家の言葉に対する答えであろう。マルト・ビベスコが修復に17年もかけた城館のモゴショアイアは、ワラキアに迷い込んだ見事なヴェネチア建築と言われた。

20世紀の前半まで生き延びた貴族階級はモゴシォアイアのように場違いな所
もあろうが魅力もある。多くの読者向けの小説の中で作者は貴族の弁護を
行ったのである。 (完)